
IS インフィニット・ストラatos Wが羽ばたく時

アクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラatos Wが羽ばたく時

【Zコード】

Z6311X

【作者名】

アクア

【あらすじ】

ガンダムWとHSの混ざった作品です。
一夏がヒイロだったり
ある人物が登場したりなど
改造系です
温かくみてください。

プロローグ（前書き）

一夏と千冬さんがこわれています
それはダメだという方はブラウザバックにてお戻りください。

大丈夫な方はどうぞ

プロローグ

IS 正式名インフィート・ストラトス

数年前、篠ノ乃 束が作りだした マルフォーム・スース
しかし、世界はそれを認めなかつた。
だが事件は起きた。

白騎士事件

篠ノ之 束が作りだしたIS最初の機体白騎士
世界各国からのミサイル 計2034発をすべて撃ち落とし、夕日
が落ちると同時に消えた。

この事件によりISは世界に認められた。

だが開発者と世界各国の首脳達の口論みは違つた。

開発者 篠ノ之 束は宇宙に進出するためのパワード・スースと考
えていた。

しかし、世界各国の首脳達はISを兵器として見ていた。

世界各国にISコア 計467個が散らばつた。

それによりISは戦争の抑止力となり、空軍の戦闘機などの現代兵
器が次々に処分されていった。

だが、ISには決定的な致命傷があつた。それは女性にしかつかえ
なかつた。

このことにより 女性の地位が上がつた。逆に男性の地位が下がつ
ていつた。

数年後

第1回 モンド・グロッソが行われた。

優勝者はのちにブリュンヒルデと言われる織斑 千冬であった。
この時からかもしれない。

ISにかわつた姉 織斑 千冬

幼馴染の関係である篠ノ之 篓

その姉であり、IS開発者の篠ノ之 束
この三人とかかわったために織斑 一夏の人生が狂い始めたのだろう。

そして、織斑 千冬がブリュン・ヒルデの名を手にしてから数年後、
第2回 モンド・グロツソが開幕した。

この時に、事件は起きた。

織斑 一夏の誘拐事件

モンド・グロツソ決勝戦 控室にいた織斑 千冬にドイツ軍から情報が入った。

織斑 千冬の弟 織斑 一夏が誘拐された。と

織斑 千冬はいてもたつてもいられずに、控室を抜け、自身唯一の肉親である弟を助けにむかつた。

だが、監禁せっていた場所には、織斑 一夏はいなかつた。

そう 織斑 千冬が着いた時には、事件は、解決されていた。

では、なぜ、織斑 一夏がいないのだろうか？

その真相はある人物に助けられたからである。

その人物の名は、ドクターJ

ドクターJは、自身の作った兵器MS 通称モビルスーツの戦闘試験のために織斑 一夏がいた場所を標的にした。

その場にはISが数機いたが、MS相手に歯が立たず撤退していくた。

ドクターJは監禁されていた織斑 一夏にこう言った。

「力は欲しくないかの？」

その言葉に反応した一夏は言った

「なんでもする・・・だから、その力を俺によこせーー！」

その言葉を聞いたドクターJは不気味に笑った。

「欲しいのなら、ついてこい。」

MSが動き始めたと同時に、一夏も動きはじめた。

これが織斑 千冬が来る前に起つていた事柄である。

それから時は過ぎ、一夏は田嶋の名前を変え ヒイロ・ユイと名乗るようになつた。

ヒイロ・ユイこと織斑 一夏はドクターーが言つたりシジョンを忠実にこなしていった。自身の感情を殺して . . .

ミッションの内容は、基地の破壊 極秘情報の入手など . . . その中にはISの破壊工作もあつた。

ヒイロにとつてISの破壊工作は何度も成功させていた。だが、今回は違つた。

ドイツにあるIS最強部隊 シュヴァルツェ・ハーゼの試験段階のIS シュヴァルツェ・レーゲンの破壊もしくは機能不全にするミッションだつた。

ヒイロにとつて簡単なミッションであった。

だが今回だけは違つた。

ヒイロはいつもどうりに破壊工作をしていた。そのとき、後ろから声が聞こえた。

「貴様、ここで何をしている?」

ヒイロは相手に聞こえないぐらいで舌打ちした。

「もう一度聞く。貴様はここで何をしている?」

ヒイロは、その場から逃げだす準備をした。

だが、その前に相手は動いた。

「つー

ヒイロはその場から飛び相手の攻撃をよけた。

だが、相手はそれを見逃さずに攻撃に手をくわえた。

「貴様をここに拘束せてもらう!」

ヒイロはこの時、あることに気付いた。

聞き覚えのある声だと。

「貴様! 私をなめているのか! ?」

やはり この声は . . .

「千冬姉 . . .」

「何?」

ポソリと発した言葉に相手は反応した。

「貴様、顔をこちらに見せる!」

仕方なく、相手に自分の顔をみせた。

「つ! !

相手に顔を見せた時、相手は、いや 織斑 千冬は顔の人相を変えた。

「ここまで、どこにいたんだ。一夏。」

千冬はよわよわしく言った。

だが、俺は

「つむさい」

「何?」

「つむさいと言つたんだ。聞こえなかつたか」

「つむさいことはなんだ!! 私はあの日、お前がいなくなつてから一生懸命探したんだぞ! !

千冬はそう言つたが、俺は

「だつたらどうして俺を助けてくれなかつたんだよ!! あの日だつてそうだ! 姉さんがモンド・グロッソで優勝してからまわりの目線がかわつた! 俺が姉さんの弟だとわかると勝手に期待して、勝手に失望していく! それなのに姉さんは家に帰らず、エスにずっととかわつて俺のことを忘れてたんだろ! ?」

「なつ そんなこと! ふざけんなよ!!」

「じゃあ、なんだ！姉さんは俺を一片たりとも忘れなかつたのかよ！」

「ああ、そうだ。」

「じゃあ、なんで家に帰つてくれなかつたんだよ……。」

「それは、ISのほうが忙しくて……。」

「やつぱり、そうじやないか！……自分の弟よりISをとつたんだろ！あんたの親友、篠ノ之 束の方を！……」

「…………すまない、一夏、また昔みたいに一人で一緒に……。」

「無理だね」

「なつ！」

「もう、無理なんだよ。姉さん。」

「なぜなんだ、一夏！」

「俺は、あの日から闇に生きてきた。まだ闇を知らない姉さんはもう一緒に生きれないんだよ。」

「なつ、どこに行く。一夏！」

「俺を救つてくれた人のところだよ、姉さん。もう会えないと思つよ」

「行かないでくれ！一夏！」

「さよなら、姉さん」

今回のミッションは失敗した。

「ドクター」には姉さんとあつたと伝えたら

「悔いは残つておるか？」と言われた。

だが、俺は「いいえ、残つていません。」そう答えた。

「少し、休め ヒイロよ。」

「ドクター」にそう言われ俺は、ベットに横になつた。

俺は懐かしい夢を見た。
姉さんと一緒に遊んでいた頃の夢を

プロローグ（後書き）

どうでしたか？
感想お待ちしております。

設定（前書き）

設定です。
どうや！

この小説内の設定

織斑 一夏

中学2年の頃に誘拐され、ドクター→についていく。

その一か月後、ドイツの基地にて 織斑 千冬と会つ。

専用MS ウイングガンダム

ドクター→より織斑 千冬と出会つた数日後に渡された。

性能は従来のIISを凌駕しており、使い方次第で、第三世代機を簡単に倒せる性能

武装

ビームサーベル

その名の通りビームサーベル

威力は第三世代機の装甲をいとも簡単に溶解させてしまう。

出力を最大にすれば、ISの絶対防御が発動し、操縦者までも傷つける。

マシンキャノン

肩に小型のガトリングを装備

相手が接近してきたときに有効

バスターライフル

撃てる弾数はカートリッジを含め、20発

出力しだいでは、最小でシールドエネルギーを半分まで削れる。

最大の場合は、操縦者ごと塵とかす。

大抵アニメ版と同じです。

（作者の描写がおいつきました。すいませんm(——)m

ドクターJ

機械工学のスペシャリストだったが、ISが登場したため権威が落ちぶれた。

その前までは、いろいろな財団と契約していた。

（契約会社は作中で出てきます）

時代の流れ（一夏の年と共に書いていきます）

一夏10歳 白騎士事件

一夏12歳 第一回モンド・グロッソ開催

一夏14歳 第二回モンド・グロッソ開催
決勝戦で誘拐され、ドクターに助けられた恩を返すためについて語った

この作品の一夏はEISを毛嫌いしており、それにかかわっていた織斑 千冬とは絶縁状態

さらに、EISを動かせるが、本人は嫌っているため使っていない。

設定（後書き）

設定どうでしたか？
感想待っています。

科学者、集合（前書き）

短いかとおもいますが、頑張りましたと自分は思います。

ではじめーー！

s i d e ヒイロ

俺の、いる所には、ドクター・ヒイロ含め、五人の科学者がいた。

プロフッセサー・G ステルス技術の権威

ドクトル・S 火器管制システムの権威

H教授 コックピットシステムのエキスパート

老師O 機体駆動のエキスパート

この四人はドクター・ヒイロの仲間らしい

「ヒイロよ、紹介するぞ。私の研究仲間だ」

「プロフッセサー・Gじゃ、ようじくたのむぞ」

「ドクトル・Sじゃ、ようじくな」

「H教授だ、ようじくな」

「老師のだ、ようじくたのむ」

「ヒイロ・コイです。ようじくお願ひします」

「では、せりそく話にはいるか」

「皆の者、あれは持つてきただか?」

「 」「 」「 」「 」「 」

「ヒイロ君、こひらひこ」

「は」

俺は、ドクターの言う通り五人の科学者で囮まれた真ん中に移動した。

「では、みなみを出すのじゃ」

「 」「 」「 」「 」「 」

「儂のMSの名は、デスサイズじゃ。ステルス機能を搭載している。」のMSは隠密系の作戦向きの機体じゃ

「では、次にこのMSはベーブームズ。殲滅戦用の機体じゃ。弾がなくなるとアーミーナイフしかなくなるので、気よつけろ」

「IJのMSは、サンドロック。白兵戦用の機体じや。砂漠など過酷な場所での戦闘が得意だ」

「IJの機体は、ショノロン。全地域での戦闘が可能になっている機体だ。欠点をいと火力が少ないことだ」

「では、最後に儂のMSだ。名はウイング。この機体には可変機能が搭載されてい。高速戦闘が可能じや」

「ありがとうございます。では俺は何をすればいい?」

「それは儂らがおつて教える。では最初のミッションじや。中国にある「国企業の基地を破壊してくるのじや。」

「ミッション了解。亡国企業の基地を破壊する。」

「場所はおつてデータで送る。では行け!ヒロヨー!IJの世界を壊すために」

今日、今から、俺はEISに対して攻撃を仕掛けはじめた。

「の先どのようなことが、起きよつとも

俺は、俺自身の人生を狂わせたISとその開発者を・・・

殺す・・・

科学者、集合（後書き）

どうでしたか？

感想待っています！

アンケート(複数用)

アンケートですか。

どうい

アンケート

初めまして！駄文作者アケアです！

突然ですが、アンケートを取ります！

内容はトールギスをだすか、出さないかのどちらかです。

期限は21日の0時です

アンケート待っています！！

これより下は文字稼ぎです。

アンケート（後書き）

アンケート待っています

ヰ國の、//ヲハシノ（邊境）

鎌が出来た。

でせんじやー。

中國でヨーロッパの音

side ヒイロ

俺は、今、中国の上海にいる。ドクターからの指示で基地の場所が特定するまで待機になつた。

やつぱ、すいに、中国。

熱氣があふれてる。

グウウウウ

ひゅうひゅ、腹も減つてきたし、なんか食べるか。

side out

side ???

訓練が、やつと終わつたわよ。

あの教育、どうとかならないのかしら？

ん？あれつて……一夏！？

たしか誘拐事件の時から、姿をくらましてたつてきいたけど・・・

これは、何が何でも、ひとつ捕まえて今まで、どうこうしたか聞き出しちゃる!!

待つてなさいよ！一夏！！

side out

Side ヒイロ

！？
なんか急に寒気が
・・・

ま
あ
い
づ
か

すし屋さん！ 麻婆豆腐がいいやつだわー！ (母語)

· 指掌圖 (卷四) ·

さて あとは街一帯にた

阿波新編 (甲子年)

卷之三

私よ！一夏！鳳鈴音よ！」

「そんな奴は知らないし、俺は一夏なんて名前じやない」

「なんだ、ここにいるのよー！ 夏！ 今までどこで見たのよー？」

「だから俺は、一夏じゃない。俺の名前はヒロ、ヒロ・ゴイ
だ」

「はあ？ あなたには、織斑 一夏って名前が、あるじゃない？」

「俺は織斑 一夏じゃないーーー！」

バンッ！ ！

そういう俺は、机を思いつきりたたいた。

「つーーー！」

鈴は俺の動きに驚いたようだ。

「俺は一夏ではない。食事の邪魔だ。だけ

そういうと鈴はどこかに消えた。

side out

side 鈴

何よ！一夏の奴！私心配してあげたっていつのこ！

けど、なんで一夏は「俺は一夏ではない。」って言つたんだ？

気になるわね。

side out

side ヒイロ

飯を食い終わつたと同時にドクターから基地の場所についての情報がきた。

．．．．．これは、難しいな。

基地は地下にあるし、その近くには、中国の基地もある。

どうせ、やうか．．．

今回はデスサイズを使うか．．．

思つたら、吉田 早速行きますか。

side out

亡国企業の基地内

side 責任者

私は今、かつてないほど驚いている。

いきなり、基地が爆発したと思ったら、兵士がどんどん真っ二つになつていくではないか。

私も今、必死に非常口に走っている。

「はあはあはあはあ……」

何人かが前にいた。

「お前たち大丈夫か！？」

「はい、何とか……」

「ほかの奴らは！？」

「さすいた時にはもう……」

「一刻も早く逃げるぞ！」

「了か」 ザン！－

「おい、どうした、おい－」

「よう、あんたが此処の責任者か？」

「誰だ！－？」

「もう一度聞く。お前は此処の責任者か？」

「ああ！－そつだ！－いつたい何のようだ！－？」

「何、死んでもうつだけさ」

「なつ！－！」

「いいで私の意識はとんだ。

side out

side ヒイロ

ふつ、最後の奴も殺したし、爆弾仕掛けで逃げますか。

「にしても、デスサイズのステルスすごいな、相手からは全然見えなかつたしな

それに、このシザース、威力が高いな・・・

そう思いながら、基地の外にでて基地を爆破した。

「任務完了」

そういう、俺は帰ろうとした瞬間、アラートがなった。

「後方より敵機が接近中！ 距離1000！」

俺は、後ろを振り返ると、そこには鈴がいた。

side out

side 鈴

基地に帰つて、一夏について調べてたら

「緊急事態発生！緊急事態発生！ 山陸地帯にて、爆発が発生！
IS部隊は現場に急行せよ！繰り返す！…」

出撃命令がくだった。私はすぐにISステーションに着替え、ISを展開した。

「鈴！ あなたは先に先行して、相手を足止めして…」

「了解！」

私は一気にブーストを最大にして、爆発のあった場所に、急行した。

「敵をセンサーで発見。モニターに出ます」

つて、何あれ！？全身装甲のI.S.！？ フルスキン

あんな機体、知らないわよ！！

それでも、足止めしなくちゃや！

Side out

side ヒイロ

あれは、中国の第二世代機の甲龍か。

ん？ 通信だと？

「アーリーの全般装甲ーおとなしく投降しなやー」
フルスキン

卷之三

「答えなさいよ……」

おーお、いい具合に怒ってるよ。さて、増援が来る前に倒すか。

「敵IISを破壊する。」

「男の声！？」

俺はデスマシンのステルスを発動して、甲龍の背後に回った。

「何！？ビームに消えたの！？センサーにも反応しない？！」

「お前の後ろだよ」

「え？！」

俺はシザースで、斬りつけた。

「嘘！シールドエネルギーが！？」

「もう、いつも！」

「エネルギーが！！」

「残念だったな…………鈴」

「その声…………まさか」

「じゃあな」

「待って！一夏！」

side out

side 鈴

そんな . . . 一夏が、フルスキン全身装甲のIISを使ってるなんて . . .

「鈴！ 敵は！？」

「「めん・逃げられた」

〔敵はどう！？〕

「「めん・私もわからな」」

「さう . . . わかった、基地で会いましょう。」

そのあと、私はその場に立ち去っていた。

（なんで、一夏が、IISを使っているの？ なんでこの場所にいたの？ わからな）よ、なんであんな優しかった一夏があんなになつてゐるの？ 決めた、今度会つたときは必ずとつ捕まえてやるだか

ら！

待つてなさいよ！ 一夏！ ！）

side out

side ヒイロ

俺は、今、山の中に隠れている。

俺は、任務が終わったためドクターーーに連絡をいれた。

「中国でのミッションは成功したよ。ヒイロよ」

「はー」

「では次の任務を言い渡す。次の任務はフランスにある、『トヨノア
社』が何やら不穏な動きをしてある
この動きを探つてくれ、ヒイロよ」

「任務了解」

俺は、ウイングを展開し、バード形態になつてフランスにむかつた。

中間で、リラシップ（後書き）

どうでしたか？

次は前篇 後編に分けてやります

フランスといえば、やはりあの子が出ます。
それでは次回にお会いしましょう。

アンケート結果

アンケート結果です！

トールギスは出すことになりました。

アンケートに答えてくれた方々がここは弾に、という意見が多かったので、弾にトールギスを渡します！

次回予告！

フランスに着いたヒイロ。

その近くには、花畠があり、一人の女性がいた。

「君は誰？」

「俺は、ヒイロ・ゴイ

「

「ヒイロよ、試作段階のMDを送る。性能結果を図ってく

「ヒイロ！僕を連れていく！」

はたしてヒイロは、少女と出会い、何を思つのか？

次回、フランスでの出会い、前篇

アンケート結果（後書き）

アンケートに答えてくれた方々、ありがとうございました！

次回作は来週になるかと思います！

それでは、また！

フランス・THE・Mission (前書き)

一話構成でしたが、一話にまとめました。

では、どうぞ!~

フランス・THE・Mission

side ヒイロ

俺は今、フランスに着いた。

俺はドクターからの指示がないため、あたりを散策している。

あたりを散策して、数分 僕は花畠に出てきていた。

そこには、一人の少女がいた。

「あなたは、誰？」

話かけられたからには、答えるが。

「俺は、ヒイロ・ユイ」

「へえー、私はシャルロット、よろしくね」

「ああ」

「ヒイロは、なんでこんなところに？」

「おお」とをするためだ

「おおむねいつですか？」

「それは、言えない」

「そ、う、な、ん、だ、」

「ところで、デュノア社がどこにあるか知ってるか?」

HCU-1

「あんな奴の話をしないで！」

- おしゃれ！

シャルロットは花畠から起つて消えた。

side out

Side シャルロット

なんでヒイロはあんな奴が経営してる会社のことを聞いてきたの？

けど

またヒイロに会いたいなー

あれ?

なんで、僕ヒイロのことと思つてるんだ?

もしかして

side out

「ヒイロよ、任務を言い渡す

デュノア社の思惑がわかつた。奴らは無人ISを作ろうとしている。

まだ、計画は始まつたばかりだが危険じや!

すぐに、デュノア社のIS研究所に行き、破壊してくれ!

「任務了解」

「そうじゃ、言つて忘れていた

今からそつちに試作MDを送る

機能実験をしてくれ

「了解」

side ヒイロ

俺は、ドクターから送られてくる試験MDを待つている。

〔北東より一機のMDが接近、間もなく接触します。〕

俺の前に青と赤のMDが降りてきた。

青がヴァイエイト、赤がメリクリウスか

何々、ヴァイエイトはビームキャノンだけで遠距離か

そもそもってメリクリウスはシールドビームガン、プラネイト、
イフハンサー？

なんだこれ？

「ヒイロよ」

「ドクター！ いきなりなんですか！」

「プラネイト、ティフロンサーについて説明じみとおもつての」

「驚かさないでください」

「すまんな、では説明する。

「プラネットイトディフォンサー」とは、展開しているとき、ゲームや実弾などを無効化する優れものじゃ」

「なるほど」

「じゃが、威力が高いものだと貫通してしまう。気をつけられ」

「了解」

「では、任務を開始してくれ」

「了解、これより任務を開始します」

「つむ、では頼むぞ」

俺は今、デュノア社のIS研究所の近くにいる。

まわりにはガードマンが複数、IS操縦者が4いや今研究所出できた奴を合わせて5人か。

？ あそこにはシャルロットか。だがなぜ？

まあいい、今は任務を完遂する。

「ヴァイエイト、メリクリウス 行け」

二機にそう言つとブースターを一気に最大まで上げ、研究所に突っ込んでいった。

「敵襲！ IS操縦者はISでの応戦を、ほかは機銃での応戦を！ 繰り返す！」

まず、ヴァイエイトがビームキャノンを発射、ISが一機落ちた。

ヴァイエイトが狙われたため、メリクリウスがプラネットディフェンサーを開き、まわりからの攻撃を防いだ

この連携を何度もやり残りはシャルロットのISだけになった。

「くつ…いつまで隠れてるつもりなの…」

やはりセンサーで気付いていたか。

「ヴァイエイト、メリクリウス 止まれ」

俺がそつと機の動きが止まった。

「…。ヒイロー君がこの一機を操っていたの…。」

「やうだ

「なんでこんなことを…。」

「デコノア社がある計画をじょとじていたからだ

「ある計画?」

「ヒリを無人で動かそつとする計画だ

「なつ! そんなことは無理だ…。」

「やうとわかつていてもやめひじしたんだ

「じゃあ、ヒイロはその計画を破壊するためにここに来たの?」

「やうだ。 お前はどいつなんだ? デコノア社は潰れるだ?

俺が言つとシャルロットはうつむいた。

「それとも、俺についてくるか?」

「えつ…。」

「ついてくるかと聞いたんだが、どうする?」

「…………うん、わかった、ヒイロについでいくよ

それに、僕は……愛人の子だからね

「つ！…………すまない、シャルロット」

「ううん、大丈夫だよ。あと僕のことはシャルって呼んで

「わかった、シャル」

「うん！」

「それじゃあ、行くぞ

「わかったよ、ヒイロ」

こうして、デュノア社の計画と共にデュノア社が工芸業界から消えた。

「ドクター、いいですか？」

「どうした、ヒイロ君」

「デュノア社のHS操縦者、シャルロット・デュノアを保護しました。

「一日、基地に帰還してもいいでしょうか?」

「うむ、いいだろ?」

では、待つてゐるぞ

俺は、シャルと一緒にドクターたちのいる秘密基地に向かつた

フランス・THE・Mission（後書き）

いかがでしたか？

感想を待っています！

次回予告！

ドクター達がいる秘密基地に帰還したヒイロとシャル

シャルは基地でいったい何を見るのか？

次回！基地での遭遇

基地での遭遇（前書き）

短いかもしませんが

どうぞ！

基地での遭遇

side ヒイロ

俺は、シャルと共にドクター達のいる秘密基地に向かっている

「ねえ、ヒイロ。ドクターってどんな人なの？」

「一言でありますな。・・・マッドサイエンティストかな」

「へ、へえー。うなんだ。」

「けど、作る作品はすべて同じよ。

そろそろ着くから準備して

「うん

IN 基地ドッグ

「ヒイロよ、久しづりじやな」

「ドクター」も、またなんか作ってるんですか?」

「セリだとも、

そつちこころの子がシャルロット・デコノアかね?」

「は、はーーー」

「監視じゅせんじよー

では、案内してやるわ。つこてきなわー」

「はー」

I N 研究室^{ラボ}

「おや、ヒイロが、よく帰つてきたな」

「プロフュッサー、お久しづりです」

「つむ、よく帰つてきたな」

「ドクトル、それに老師〇、H教授。今戻りました。」

「そつちこころのが、シャルロットかね?」

「はい！シャルロットです！よろしくお願いします！」

「堅苦しきなべりよ」、

ヒイロよ、機体を調べるので渡してくれ

一
はい

「終わつたら、声をかける。それまではいいぞ」

「はい、それでは。

シャルロット、行くぞ

「あー待つー！ヒイロー！」

「若いときは、いいの~」

「そんな」「とすむわざをひねり出すやうに」

卷之三

今俺は、基地にある俺の部屋にいる。

「シャルロット。お前が此処に来たからには、人殺しの業を背負つことになる。

それでもいいのか？今なら戻れるぞ」

「ううん、それでも僕は、その業を背負つよ」

「そうか、わかった。だったらお互い頑張ろつ、シャル

「うそ、ヒイロー！」

「そうだな、だったら俺の本当の名前を教えるよ

「え？ ヒイロって本当の名前じゃないの？」

「ああ、本当の名前は一夏だ。

・・・・・織斑 一夏だ

「え！ 織斑つてまさか！」

「あいつの話をするな……！」

「！」「めん、一夏」

「いいんだ。」
「すまないな シャル」

「ヒイロよ、機体の調整が終わった。ラボまで来てくれ」

「やつとか、行くぞ」

「うん」

INI 研究室^{ラボ}

「来たか、ヒイロよ」

「それで、機体の方は？」

「万全じゃ、

「わかりました」
「ただ、シャル専用にサンドロックを取り外した」

「シャル、こっちに来なさい」

シャルはドクターのもとに向かった。

side out

side シャル

「シャル、いつ元^{ヒタチ}に来なさい」

「はい」

私は、ドクターのもとに行き、新しい力を見た。

「これはサンデロック、砂漠など過酷な場所での、戦闘を有利にするMS^{ミリタリースーツ}」

「あの、ドクター」

「なんじや、シャル？」

「MS^{ミリタリースーツ}についていたい？」

「おお、そうじゃったの、

「うはわかりやすく言えば、人型ロボットじゃな」

「やつなんですか（なんかす）へ省略されたよ（う）な？」

「サンドロックの武装はバルカン・ホーミングミサイル・ヒートシヨーテル・シールド・シールドフラッシュ・クロスクラッシュジャー」

「は」

「それでさ、おぬしに『コードネーム』を授ける。

『コードネーム』はカトリー・ヌ・カーデ・ウイナー」

「はーーー」

「では、ヒイロを呼んできてくれ」

「れでヒイロと一緒に戦えーーー」

side ヒイロ

「ヒイロー・ドクターが呼んでるー」

「わかった」

ミッショーンか、久しぶりだな

「ヒイロよ、彼女のコードネームはカトリー・ヌ・ウード・ウイナー
じや」

「わかりました。これからよろしくな、カトリー・ヌ」

「うんー。」

「それでは、ミッショーンを言い渡す。

場所は日本、内容は倉持技研にある試作ISの破壊じや。

操縦者の名は更識 簪、対暗部用暗部の家の出身じや

「任務了解、試作ISの破壊を開始する」

「任務にはカトリー・ヌも連れて行ってくれ」

「了解」

「それでは、行つてきてくれ。一人とも」

「了解」

日本か . . .

いい思い出はあまりないな。

side カトリーヌ

これから日本で任務だ。

初めてだけど頑張ろう!

「行くぞ、カトリーヌ」

「うんー、ヒイロ」

s i d e o u t

二人はまだ、この先に起ることを予想もしていなかった。

基地での遭遇（後書き）

どうでしたか？

次は番外編です！

ドクター達と一緒に話です！

それでは、どうぞ！

この話はドクター達の昔話である

「こ、このマジは封印すべきじゃ！」

このマジでは、操縦者次第では、世界が滅ぶぞ……。」

「わかつておる。

そもそも「さなものを作った儂らがいけなかつたんじや」

「では、こつは封印するかの」

「アハ、じやな、場所はあの島でこいか」

「あの島だと…?正氣か…?」

「儂はあの島だから、封印でわると考へてゐる

儂の始まつた場所であるあの島なり」

「アハ、じやな、今思えども、さうあつたから始まつたの

「では、あの島で封印するかの

「ワイングゼロ……」

織斑
一夏の昔話

俺は、この世界にエリが出てからすべてが変わった。

今まで優しかった女子達が急に態度を変え、俺たち男に、命令をしてきてきた。

「これ…ちゃんと付けなさい…」と

俺たちは最初は反抗した。

だが、女はそれを先生に嘘を言った。

「先生ー男子達が私達に暴力をふるつてきましたー！」

先生はその女達のことしか聞かず、俺たちは、体罰を受けた。

その先生も女だつたからだ。

「お前たちのせいでストレスが溜まつてんのよーーー。」

田に田に反抗していくやつは少なくなり最後は、俺と仲が良かつた
五反田　弾だけになつてしまつた。

「弾、この先どうある?」

「やうだな、俺たちがあいつらに平伏せたら、終わりだ」

「だけど、俺らの変わりに暴力振るわれてる奴らをこれ以上みて
られない！」

「わかつてん！わかつてんけど、どうしようともできねえん
だよ」

「弾・・・」

その日を境に俺たちの反抗は終わつた。

女達は調子に乗り、俺たちを見下した。

俺は、第一回モンド・グロッソンでの野郎が優勝してから、女達の態度が急にかわった。

「織斑君って、千冬様みたいに才能あるんでしょ？」

「そればかりを言われ、才能がないとわかると

「なんも才能のないあなたなんて、千冬様の足手まといにならぬよ……」

「ああ、そうだよ。だからどうした？」

「弾に妹がいるが、妹の友達からも言われていたらしい。

「あなたなんて蘭ちゃんより肩よー。」

「俺たちと一緒にその一年を過げ」した奴らは全員、女性恐怖症になつた。

その後は、女と話すこともなく、女とも接しなかつた。

弾も妹とは、決別し、家の中で話かれられても無視していく。

その妹がしつこく話かけると弾は、

「俺に話かけるなーー！」

「つ言い、妹を突き飛ばして、敵を元にお灸をすえられたらしこ。

第一回モンド・グロッソで、ついが決勝が始まる前に俺は誘拐された。

今の俺にとっては人生の転機だった。

ドクター達にも会え、俺に新しい力 ガンダム をくれた。

ドクター達には感謝してもしきれないほど恩がある。

その恩を返すためなら俺はどんなことをする。

たとえ、それが

なんであろうとも・・・

いかがでしたか？

次は日本です！

楽しみにしててください！

日本編 1 (前書き)

弾、登場！

外伝に出てきた機体もでます！

それでは、どうぞ！

side ヒイロ

俺は、今力トリーヌと一緒に飛行機に乗つて、日本にむかっている。ドクターが飛行機で行け、と言つてきたので一人分のチケットを買つた。

パスポート？偽装に決まつている。

「ヒイロ、何か飲み物頼もうか？」

「ああ、緑茶で頼む」

「わかつた。すいません、緑茶と紅茶をください」

「はい、少々お待ちください」

そう言つと、キャビンアテンダントは奥に消えていった。

そして、俺は手元にあるヤード倉持技研を調べていた（別名 ハッキング）

．．．なるほど、打鉄式式か、

打鉄をベースにして、そこにミサイルなどの弾頭系を入れた機体か、

ベビーアームズの方が強いな

「緑茶と紅茶です」

「ありがとうございます。はい、ヒイロ」

「すまないな、カトリー・ヌ」

「平氣だよ、それでビリーハ、倉持技研のヒロは？」

「じいて壇つなら、ベビーアームズの劣化版だな」

「へー、やつなんだ」

「今日は簡単そうだが、厄介なのが護衛にいる」

「その護衛って？」

「ロシアの国家代表の更識 楯無だ」

「国家代表！？」

「今回は少し、きつくなりそうだな。気をつけないとな」

「うん」

。。。。。。。

「ドクターから暗号通信?..どうこいつだ?」

「ヒイロよ、日本に儂らの協力者がある

まずはそいつに会ってくれ

名は五反田 厳

儂たちの昔の仲間じゃ

では、頼んだぞ

「弾の爺さんが!?

「知ってるの?ヒイロ」

「俺の小学校時代の親友 弾の祖父だ」

「そうなんだ」

ローン

「間もなく、当機は着陸態勢に入ります。

シートベルトをお締めください」

「ありがとうございます」

久しぶりだな、日本

IN 成田空港

成田空港か、久しぶりだな

「日本か？」

「そりが、カトリーヌは日本に来るのは始めてか」

「うん！僕、日本に来るのが夢だつたんだ！」

「じゃあ、まずは会いに行くか。巣さんに」

side out

side カトリー・ヌ

「ここが日本か」

秋葉原にも行つてみたいし、原宿にも行つてみたいな

「ここが、日本か？」

「そうか、カトリー・ヌは日本に来るのは始めてか」

「うん！僕、日本に来るのが夢だつたんだ！」

「じゃあ、まずは会いに行くか。厳さんに」

「厳さんか、どんな人かな？」

「ねえ、ヒイロ。

「厳さんってどんな人？」

「あの人は優しくて、女尊男卑にも屈しないすごい人だよ」

「そ'うなんだ」

会つてみたいな」厳さんに

side out

side ヒイロ

久しぶりだな、五反田食堂

入るか。

「いらっしゃ……つて一夏か！？」

「お久しぶりです。厳さん」

「そつちのかわいい子は？お前のこれか

厳さんはそつこつと小指を立てた。

「ち、違います！！」

「はははー！冗談だ、冗談だよ」

「厳さん、俺たちはあなたの力を借りにきました」

「どうじつことだ？」

「ドクター」と言えば、わかりますよね？」

「… そうか、あいつが」

「伝言を預かっています。

「久しぶりじゃな、また昔みたいにやらないかの？」

以上です」

「そりゃ、また始める気か…」

のつた！ついてきな、二人とも

「「はい」」

俺たちは、厳さんに連れられて食堂の地下にいる。

「厳さん、これは？」

「俺が作った試作機トールギス

「… いっつはスピードに難があつてお蔵入りした機体だ」

「では、いったい誰がトールギスを使うんですか？」

「ああそいつは「そこから、先は俺に言わせてくれ、^{じい}祖父ちゃん」

「その声、弾か！久しぶりだな！」

「ああ！懐かしいな、一夏！ で、そっちの女は？」

弾は声のトーンをさげた

そうだった。弾は極度の女嫌いだった。

「そんな声だすな。この子はカトリー・ヌ・ウード・ウイナーだ」

「よ、よろしく」

「ふん、まあいい。

で、お前が日本に来るつひ」とせやつぱり

「そりだ、お前の力を借りに来た」

「OK OK いいぜ。俺とテールギスでやつてやるよ

「やつぱり、お前が操縦者か」

「まあな」

「よしー話も終わつたみたいだし、ついてきなー」

厳さんに言われて、俺たちはブリーフィングルームに移動した。

IN ブリーフィングルーム

「で、目標の場所は？」

「場所は倉持技研

「そこにある、試作ISの破壊だ」

「なんだ、あいつらの所か

「厳さん、どういふことですか？」

「俺は、あそこで働いていてな、そん時にトルギスを作ったんだよ

だから、俺の名前を言えば、簡単に入れやが

「これで進入路は確保できた」

「そうだ、一個言ひ忘れていた

「なんですか？」

「あそこには、もう一機MSがいる

俺がトールギスを作った後にできた機体だ。

名前はガンダムアクエリオスだ。

研究者たちが厳重管理している

「わかりました。

こちらで対応します」

「よし、これから、作戦を伝える。

内容は試作ISの破壊、それだけだ」

「「「了解」」」

「研究所には、俺が伝える。

すこし、待つてろ」

かくして倉持技研攻略が始まろうとしていた。

いかがでしたか?

次回! 倉持技研攻略!

倉持技研と言えば! あのキャラが出ます!

お楽しみに!

倉持技研攻略！（前書き）

TPPの正式表明前に投稿しました！

では、どうだ！

side ヒイロ

巣さんは、倉持技研に連絡を入れて今、交渉している。

「俺だ。そつちに俺の孫とその友達を連れて行きたいんだが

・・・何！？ 専用機作つてるから無理だと！？

こつちは例のあれを起動させるために行きたいんだよ！

・・・・・ちつ！てめえじや話にならねえ室長呼んで来い
！—！

・・・・・なんか、雰囲気が変わっているよ！

ま、まあ いいか！（現実逃避）

「ヒイロ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

カトリークにも、心配されたよ・・・

「よしーお前らー準備できたか?ちょっと長引いたが行くぞー!ー!」

卷之三

「表で待つてな、今車出しへくるから」

そばに、と轟さんには車庫に向かっていった。

なあ、一夏さんでお前あい一はビバ日本で言われてるんだよ！」

二〇四

事件記録

「ああ、俺はもう、あいつとは決別した」

弾の言ふ
あの事件は俺が誘拐された事件だ

あれは、世間では「モンド・グロッソ事件」

なぜその名になつたかといふと、第一回のモンド・グロッソ決勝戦前に俺が誘拐されたからである。

その時に、あいつが決勝戦を放り出したからだと。

世間はウザつたいな

ツブシタクナル

つー瞬あいつ（・・・）が出てきやうになつちまつた。

あれは、俺が初めて人を殺した時に生まれた二重人格だ。

その後、俺はあいつに乗つ取られ破壊の限りをつくして、あいつは眠つた。

その後、ドクターに処方箋をもらひ、あいつを今まで封じてきた。

あいつが出てきたら、いよいよ全員殺してしまつていい。

「おーい、一夏 早くしろ

「ああ、今いく

さて、行くか。

「俺だ。入れてくれ

「わかったしました。よつひーん、倉持技研へ」

「厳さん、いきなり来るのはよしぐだわい」

「悪いな、仁」

「みんなに紹介する。」こつは、「牧野 仁だ。挨拶しどけ

「」「今田はお願ひします」「」

「ええ、よろしくね」

「やつそくだが」、あれの場所に連れて「行つてくれ

「わかりました」

俺たちは、厳さんと「ささひこつてこつた。

s.i.d.e o.u.t

「こじが、昔祖父ちゃんが通つていた所か ・・・

「あそこが今開発中のHS研究室だよ」

「ふん、あんな奴ができたせいで ・・・

「あの子、何してるんだ?」

「おこ、弾一、どこ行くんだよー。」

「すぐ、追いつくー。待つてー。」

「なあ、お前。そんなとこで何をつくるんだ?」

「・・・あなたは?」

「俺の名は反田 弾一お前は?」

「簪つて呼ぶけどいいな?」

「私は更識 簪」

「・・・うん」

「お前は、なんだ?」?

「私、こじの専属操縦者だから ・・・」

「……か……ちつちつこな

「なんで、お前はここで乗るんだ？」

「え？」

「だから、お前はなんでここで乗るんだって聞いてるんだよ。」

「ひー。」

「やべー、また（・・・）やつちゅうたよ

「あー、すまん。悪戯はなかつたんだ」

「・・・・・」

「 もう一回聞くナビ、なんでここで乗つてるんだ？」

「・・・・・私にお姉ちゃんがいるんだけど、

そのお姉ちゃんに私は、いつも負けてるの。

「だから、私はお姉ちゃんに認めてもらつたために、『そんなんかよ』……？」

「そんだけかよ、ちこつて認めてもらつたためにもほかにやせねばいいだろ」

「・・・あなたにはわかるの……？」

姉にも負けて！まわりからも「期待外れ」とか言われる気持ちわかるの！？」

「わかるぞ」

「！？」

「俺にもあつたさ」

「そうだな、あつたな。」

「あいつに、劣つてたな、俺

「俺には、妹がいるんだが

妹には、学力や人望、いろいろ負けてた。

「そん時は、死のうかぐらう考えてたよ」

妹の友達からも言われたよ「恥さらしの兄貴だよねー」とつて

「そんな・・・」

「何かで見返せるように頑張りな。」

「じゃあな」

「俺は、その場から離れようとした

side out

side 簪

五反田 弾・・・なんて人なの

私と同じ境遇だったのに、それに打ち勝つだなんて・・・

「じゃあな

「あつ、待つて!..」

「なんだ、簪?」

「私も・・・・・私も連れていくて!..」

「なんだと?」

「私は、ずっと逃げてた。」

けど、あなたの言葉を聞いて振り切れた

私が決めるんだ。誰からでもない・・・私が!

「だから、あなたについていかせて!..」

「俺、いや、俺たちが通る道は過酷だ。

それでもいいのか？」

そういわれてけど私は、

「いいよ！そのためになら、なんでもする！」

「…………どうかな？」

「…………いいぜ、わかった

俺についてきな

「うん！」

此処からどうなことがあろうと私は……

進む！私が決めた道をまっすぐ進む！

遅いな、弾の奴。

「おーい！一夏！」

「やつと来たか

どんだけませ・・・誰だ、あれ？

「すまない、みんな

「こいつは更識 簪

俺たちと共に行動する新しい仲間だ」

「そ、更識 簪です！よろしくお願ひしますー。」

「へー、あの女嫌いの弾が認めるなんてな。

「俺の名はヒイロ・ユイ。よろしく頼む

「私は、カトリー・ヌ・ウーバ・ウィナー。よろしくね、簪

「こいつの祖父 五反田 厳だ よろしくなー。」

「いいんですか？簪わん

「？」

「…………大丈夫です！」

「わかつた、来なさい。それに歸れんも」

俺たちは仁さんに連れられて厳重管理室に向かつた。

IN
廠重管理室

あれが、アクエリアス・・・

なんて言うか、派手だな。

「巖さん、あれが……」

「 そ う だ 、 あ れ が 僕 た ち が 作 つ た M S

アクエリアスだ！」

「あの…」

「なんだ、籠ちゃん？」

「MSつていつたい？」

「MSつていづのせ

「Iより装甲が固くスピードもあり、何より攻撃力が高い。

ふつわMS一機で十機のIを倒せる」ともない代物だ

「そんなものがあるなんて！」

「そうだ、言い忘れてたな。

この二人もMSを持つてるが

「えつー！」

「持つてるが

「そうだね

「そうだな

やつぱり、そんな物騒なものがあると驚くか

「そうだ！」

お前さんに、アクエリ亞スを渡す！

「そ、そんな…いきなり！」

「大丈夫だ！心配すんな。

おーーーおおえーーーわーわーの嬢ちゃん専用機!!あーーー」

ଶାନ୍ତିକାନ୍ତିରେ ଶାନ୍ତିକାନ୍ତିରେ

いきなり工作道具を持つてる人がいきなり出てきたぞ！？

どうなってるんだ！？

「ヒヤロ柄、ヒーリドはあまり気にしないほうがいいよ」

「さんが俺に語りてきた」とがわかるよつな気がする。

キングクリムゾン！！

「できだぞ、嬢ちゃん

お前さん専用にい仕上げたぞ」

「あ、ありがとうございます！」

「よし…さつそく性能実験するぞ…」

みんな！シールターに避難しろ！

弾！ヒイロ！カトリー！…そして簪！MSを展開しろ！

「…」「了解！」

今日はヘビーームズで行くか。

「来い！ヘビームズ！」

「来て！サンドロック！」

「行くぞ！トールギス！」

「行くよ！アクエリアス！」

全員がMSを呼び出した。

「じゃあ、あとは任したぞ！」

厳さんたちはシェルターに向かっていった。

「俺がドーバーガンで道を開く！行くぞ！」

弾がドーバーガン（ビーム使用）を上に向けた。

「行くぞ！」

弾がそういうと上に向かつて撃つた

そして、俺たちの倉持技研攻略が始まった

倉持技研攻略！（後書き）

どうでしたか？

自分はTPPが怖くてたまりません

ですが、それにめげずに投稿しました

野田総理、頼みます！

倉持技研攻略、成功！（前書き）

タイトルが思いつかなかった

『氣にせき』にじりつべー

倉持技研攻略、成功！

side ???

私は、ここ倉持技研で臨時警備をやつてるわ。

それにしても、さつきから、簪ちゃんの姿がみえないのよね～

「どう行ったのかしら？」

それに、さつき会った研究員の人たちが慌てて走つて行つてたし・

いつたい何が始まろうとしているの？

ドオオオオオオン！――！

何が起きたの！？

△第一厳重管理室にて爆発、非戦闘員はシェルターに、戦闘員はただちに武器を持ち、現場に急行してください。繰り返します・・・

くつーこんな大規模な爆発やばいわね・・・

・

「霧纏の淑女起動！」
ミステリアル・レイディ

私は霧纏の淑女を起動させて爆発が起きた場所に向かつた。

side out

sideヒイロ

弾が上に向かつて、ビームキャノンを一発撃つて地上に圧しついた。

やはり、警備のIIS操縦者が集まつてゐるな。

「そこにある4人！何があつた . . . !？」

気付かれたか、

「そここの4機に警告する！技研内での建物損壊で拘束する！

全身装甲を解除し、地面に手をつけ！

警告は一度だけだ！」

「どうする？」「

「どうするつて……倒すだけだな」

まあ、そつだがな

「よし、いくぞ。」

「「「おつへはつー」「」」

全員で一斉に攻撃を仕掛けた。

side out

side 簪

私専用のMS アクエリアスの武装は

ドーバーガン実弾、ビームヒートロッドと105ミリライフル

あと、アンチEWウイルス

これは、自分から半径800mmにいるHSのシステムすべてを停止させるウイルス

私は最初に向ってきた打鉄に向かつて実弾のドーバーガンを撃つた

「…? キヤー! 」

… 朝たつたけど威力が高すぎて一撃でHSが解除された

… MSUつてす! 」

HSよりも強い…

それにスピードも武器の威力も違う

けど… 強い武器を持ってばその分誰かを殺めてしまつかもしれない…

… だけど、私はその業をちやんと瓶負つていいく!

「HSの未確認HS! HSを解除しなさい! 」

HSの瓶は… む姉ちゃん! ?

「HSのHS! 解除しなさい! 」

私は顔の部分だけ、解除した

「! ? 簪ちゃん! ? なんでそれに乗つてるの! ? 」

「… 私は私の道を進むの…

更識家に決められた道でもなく、私の道を進むの! 」

私がずつと思つていたことを言つた。

「簪ひちゃんー今からでも遅くないわー！」

そのHISを解除してー！」

けど、私は・・・

「・・・いや

「え？」

「こやつは言ひしるのー。」

「つーーー。」

私が初めて怒り、お姉ちゃんは驚きを隠せなかつた。

「大体なんでお姉ちゃんは私のことを気にしなかつたのー？。」

私がお姉、あなたの足手まといだとでも言いたいのー？。」

私がお姉ちゃんのー」とあなたといつたら、あの人は顔を真つ青にした。

「や、それは・・・」

「聞こよどんでるつて」とは、やつ黙つてゐるんだ。

・・・私は今をもつて、更識家から縁を切りますー。」

「……そんな！」

「考え直して、簪ちゃん！」

もう、決めたんだ 私は

「もう遅いだよ

あたしはもう決めたから

それに……私は、私を認めてくれた人に着いていくの

そう……弾が……認めてくれたから

「そんな……」

もう、話すことなんてないから決めよう

「アクエリアス！」

アンチエイワイルス、起動

^OK

アンチエイワイルス起動

．．．対象捕捉

敵機に対し、ウイルス起動

「…? どうしたの、霧縛の淑女!」
〔ミスティカル・レイティ〕

「システムに異 ザザザ 常アリ

〔ヒザザザザザ 繫きザザザ 解除〕

「そんなん…」

「あいつは地面に落ちていった。

「もう、あなたとは話す義理もなくなつたわ

…。…。…。…。…。…。

「はい、じゅりん籠」

〔じゅりん、ヒイロ〕

「この技研の勢力はすべて排除した。

「この場所まで来てくれ」

「わかった」

「アクエリ亞スのスラスターを一気に吹かした

side 横無

簪ちゃんから、あんなこと言われたの初めてね . . .

簪ちゃんが更識にあんなに憎んでたなんて . . .

あんなに拒絕されちゃったし . . .

本音や虚にも顔が出せないわね . . .

けど、簪ちゃんを認めたって子 . . .

．．．もしかしたら、簪ちゃんを癒してくれるかも知れないわね

頼んだわよ

side out

side ヒイロ

全員が五反田食堂の地下に戻ってきた。

「おひー・おおひー、みくせつたなー！」

「ー? 厳さん、いつの間にー?」

「あそこ」のシールターは「」に繋がつてな」

たしか、技研から「」の距離は . . .

5? !?

どんだけだよ

「まあ、アクエリ亞スの起動も成功したし、祝賀会だー！」

「 「 「 「おーーーー!」」」」

俺たちは食堂でたらふく飯を食べた。

. . . 災難もあつたが

ああああー・ああああー!

「ヒイロ、聞こえてるか?」

「はー、ドクター

「なんでしうづか？」

「次の任務じゃ

場所はイギリス

IS研究所を襲撃してくれ

「任務了解」

「では、頼んだぞ」

さて、また忙しくなるか！

倉持技研攻略、成功！（後書き）

いかがでしたか？

感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6311x/>

IS インフィニット・ストラatos Wが羽ばたく時

2011年11月20日08時59分発行